

研究課題 (テーマ)		臨地実習指導を担う病棟看護師を対象としたユマニチュード技法の教育実践とその効果	
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学科	准教授	青柳 寿弥
分担者	看護学科	名誉教授	竹内 登美子
	看護学科	教授	岡本 恵里
	看護学科	教授	張 平平
	看護学科	教授	比嘉 肖江
	看護学科	准教授	伊藤 裕佳
	情報システム工学科	教授	唐山 英明
	情報システム工学科	准教授	高野 博史
研究結果の概要			
<p>【背景・目的】本学の看護学部では、新生児から高齢者まで、障害のある人もない人も、誰もが尊重され自律した生活を継続するための基本となる包括的コミュニケーションケア技法（ユマニチュード®）を、特色ある教育の一つとして導入した。各領域別の臨地実習が始まり、学生は実践の場で学びを活かしているが、臨地実習指導を行う病棟看護師らにユマニチュードが浸透しているとは言えない現状である。</p> <p>本研究の目的は、臨地実習指導を担っている病院の看護師を対象として、ユマニチュード技法の教育プログラムを実施し、その教育効果を明らかにすることである。本研究により、看護師に早期にユマニチュード技法を修得してもらうことで学生への指導に活かしてもらうことができる。また、臨地実習病院において、ユマニチュードが普及し更なる看護ケアの発展につながることを期待される。</p> <p>【方法】臨地実習指導を担っている看護師を対象に、ユマニチュード技法の教育プログラム（以下、プログラム）を実施する。教育プログラム実践の前後に実施する質問紙調査とグループによる半構成的インタビューデータ、プログラム実践中のベッドサイドケアの動画映像・音声データから、教育効果について分析をおこなう。</p> <p>【結果】プログラムを受講した看護師は6名（女性4名）であった。受講した対象者のプログラム実施前後の一般性セルフ・エフィカシー（自己効力感）尺度値は、プログラム前後で上昇がみられた。また、アンケート集計では、プログラム受講前は、受講者全員が、日々の患者へのケアについて困難を感じることもあると回答し、意思疎通困難やケアに対して抵抗されうまくいかない場面で困難を感じていた。プログラム受講後には、受講者全員が、ユマニチュード技法を用いることによって、患者の笑顔や言葉が増えたこと等患者の反応に変化を感じていた。ユマニチュード技法を学ぶことによって困難なケアが解決できると全員が回答した。</p> <p>プログラム受講前後におけるグループによるインタビュー内容およびプログラム実践中の動画映像・音声データについては、分析中である。</p>			
今後の展開			
ユマニチュードを普及していくため、分析をすすめ、学会発表や論文投稿にて教育プログラムの成果を公表する予定である。			